緩和ケアはお節介だの巻　その２

　前回、伴走者はいた方がいいよという話でした。今や国を挙げて「がんと診断された時からの緩和ケア」などと言って啓蒙普及の努力が続けられていますし、じっさい私たちもその手先となって動いています。しかしながら何年たっても世間の反応はよいものではありません。そんな私たち緩和ケアを生業にしている医療者が、無力感に心が折れそうなときに引き合いに出す有名な論文があります。

　2010 年に権威ある英文雑誌に掲載されたもので、ある種の肺がん患者さんに対して「早期から」専門的な緩和ケアが介入すれば、QOL が改善され抑うつなども減るだけでなく、なんと寿命まで延長した、という話です。だから、あなたもその恩恵に浴してくださいという、緩和ケア売り込みの根拠であります。ただ、これにはそれなりの条件が付いていることはあまり語られません。

　ある時、この業界で有名な開業医　新城拓也先生の著書に、その論文における「早期からの緩和ケア」とは、定期的なカウンセリングのことであると書かれていて「えっ？」と思ったのです。以前その論文を紹介された時「古い論文だからネットじゃ見られないと思います」と言われて「まあそんなもんか」と思い、恥ずかしながら私は読んだことがありませんでした。そこで慌てて探したら灯台下暗しで、病院の図書館に現物がありました。

　そこでは新規にある種の肺がんの診断を受け、「早期からの緩和ケア」を受けたグループの患者さんのところには少なくとも毎月、必ず緩和ケアチームが関わるというプログラムが実行されていたのです。これに対して比較対象グループの患者さんは主治医からの紹介で初めて緩和ケアの専門職に出会うという、今の当院と同じ関わりでした。そのうえで、「緩和ケアチームが強制的に訪問したグループではいい結果が出ました」という比較研究だったのです。今でさえ、緩和ケアは「死ぬ間際に世話になるところ」ないしは「死神」だから「まだ早い」と敬遠されるのが現状です。患者さんの好むと好まざるとにかかわらず全員が強制的に緩和ケアチームとの面談をもつなどというのは、人手の面から言っても、患者さんの気持ちから言ってもムリな気がします。

　いいえそんなことより、早期からの緩和ケアというものは、それほどのお節介をもってしなければ、目に見える成果が上がらないのかという、ちょっとがっかりな感想でもありました。とはいえ、関わりを持つことが何かの役に立つのなら、それもまたアリではないかとも思います。実際、主治医の計らいで早期とはいかなくとも、がん治療途中から関わらせていただくことで、心配事を相談できる場所や人材を提供でき、望ましい過ごし方に貢献し

ているという実感もあります。世の中は変わる時には変わるものです。今は閑古鳥でも、いつか行列ができる繁盛店になるのも夢ではない、かもしれません。